

報 告

1967 年における規格委員会の活動

規格委員会 和 田 弘

1. 概 要

前年における規格委員会の活動については第8巻第3号りに報告した。それに引続いて昭和42年(1967)における海外の活動(ISO/97)と国内での活動(JIS化への協力を含む)をまとめたもので、“電子計算機と情報処理”についての標準化運動の動向をご報告することを趣旨としたものである。

2. 開催された国際会議

1967年の間に開催された会議をまとめて第1表に掲げる。表に見られるとおり、SC(Subcommittee) 1, 3, 7 と Plenary とは開催されなかった。

第1表 本年開催の会議名

月 日	場 所	会 議 名	出 席 者
1/17~19	Paris	磁気テープ labelling	欠
2/27~3	Paris	SC 8	池 辺 潤 稲葉清右衛門 北 森 俊 行
3/7~10	Berlin	WG 4/1	津田啓次郎 島 谷 和 典 海 宝 顯
3/	Geneva	SC 4 adhoc	海 宝 顯
3/13~16	Paris	SC 2	島 谷 和 典 浦 城 恒 雄
6/26~28	Florence	SC 4	瀬 川 馨 遠 藤 正
9/4~8	Geneva	WG 4/4. WG 4/3 SC 6	山 本 敏 小 林 和 夫
11/11~15	Paris	SC 5	西 村 恕 彦 研 野 和 人 大 駒 誠 一 金 光 良 衛 宇 佐 美 博
11/20~24	Paris	SC 1	欠

3. 原案のまとまった国際標準

(draft ISO Recommendation)

TC 97 が創立されて以来、数回に亘る会議を通し

第2表 draft Recommendations

勧告案番号	標 題	TC 97 の文書番号
R 1314	Code for Numerical control of Machines	162
R 1315	Axis and Motion Nomenclature for numerically controlled machines	164
R 1316	punched tape Block Formats for the numerical control of machines. Coding of preparatory functions G and miscellaneous functions M.	183
R 1317	Interchangeable punched tape Variable Block Format for positioning and straight cut Numerically controlled machines.	185
R 1318	Punched tape Variable Block Format for positioning and straight-cut Numerically controlled machines.	187
R 1319	punched tape fixed block format for positioning and straight-cut Numerically controlled machines	189
R 1052	6 & 7 bit code character sets	141
R 1320	Implementantation of 6 & 7 bit coded character sets on 7 track, 12.7 mm magnetic tape	175
R 1321	Implementation of 6 & 7 bit coded character sets on 9 track, 12.7 mm magnetic tape	177
R 1322	Guide for the definition of 4 bit character sets derived from the 7 bit code	179
R 1323	Magnetic tape labelling and File structure for Information Interchange	181
R 1418	Representation of 6 & 7 bit character sets on punched tape	139
R 890	“OCR-A numeric subset” of Draft R. 996	64
R 893	Print specifications for MICR	134
R 996	Alphanumeric character sets for Optical Recognition	136
R 1671	Dimensions of punched perforated tape	131
R 1299	Flowchart symbols for information processing	90
R 1538	Programming language-ALGOL	150
R 1539	Programming language-FORT-RAN	153
R 1672	Hardware representation of ALGOL basic symbols	224

てまとめて来たものは漸く実を結び始めた。TC 97 の Plenary で承認されれば、あとは形式的に ISO の総会を通ればよい。現在までに勧告案の形になったものを挙げると第 2 表のとおりになる。

#### 4. 規格委員会の強化

本年内に規格委員会は第 12 回 (1 月 24 日)、第 13 回 (6 月 6 日)、第 14 回 (10 月 5 日) と 3 回開催された。

国際会議の報告、重要文書への回答案審議、委員の交代、情報の交換などが議された。この他、活動の強化策が要望されたので、理事会と協議し、第 14 回の会合で〈規格委員会規定〉案を審議し、これを承認したことは注目される。

すなわち、数年にわたる活動の内容を文書化した点は除いて、独立会計制度に移行の上、外部からの財政援助とか外部団体と仕事について依託、受託が認められることとなった。

また国際会議に代表を派遣する際の旅費は従来悩みが多く、その都度電子工業振興協会を通じて援助を要請していたのであるが、今回同協会との間に覚書きを交換することによって、毎年これを予定して派遣を計画できるようになったことである。この規定は 10 月 1 日から実施に移された。

なお本年末における委員は次のとおりである。

委員長	山下英男
委員	和田 弘 (幹事)、岸上利秋 (幹事)、新井 正、安藤 馨、猪瀬 博、土井康弘、遠藤 力、海宝 顕、河辺陽之輔、喜安善市、小林大祐、齊藤 有、高橋 勲、高橋秀俊、高橋 茂、寺尾 満、戸谷深造、中摩雅年、根橋正人、野田克彦、花岡輝雄、藤田 献、橋本南海男、元岡達、森口繁一、米沢威行、魚木五夫

TC/97 には現在 8 個の Subcommittee (略して SC) と 1 個の Working-Group (略して WG-K) とがある。本委員会はそれらの行動に呼応して活動するために 8 個の分科会と 1 個の WG とを設けている。本委員会の委員にはこれらの分科会の主査にも参加していただいている。

また SC によってはその内部に Working group をもっているものがある。国内でも同様な WG が組織されている。これら諸委員会の会合数は本年の間に

120 回以上になっている。以下 SC ごとにその活動状況の概要を記すことにする。

### 5. 各 SC の活動状況

#### 5.1 SC 1

主査 野田 克彦

##### (1) ISO 関係

IFIP/ICC Vocabulary の A 章 (Data Processing Systems and Techniques) の 98 語および D 章 (Organization of Digital Data) の 110 語を削除、採用、訂正、追加に分類し 1966 年パリ会議の結果として送って来た。さらに 1967 年 9 月 IFIP/ICC Vocabulary の E 章 (Representation of Data) の 42 語と F 章 (Preparation and Selection of Digital Data) の 60 語を上記分類した WG の原案として送って来たので、現在国内で審議中である。

##### (2) JIS 用語関係

WG 1 で一般情報処理用語 50 語を選定し、定義を附して JIS 用語原案として工技院に提出した。今回提出のものは既定の計算機関係用語 JIS の見直しと、これに新しい用語を加えたものである。

WG-2 ではデータ伝送用語を一般 31 語、通信制御 28 語、誤り制御 (34 語)、情報処理用語 3 語に分け読み方、用語の意味を附して工技院に提出した。

#### 5.2 SC 2

主査 喜安 善市

##### (1) 概 要

SC 2 委員会は 8 回 (1 月 17 日、2 月 2 日、4 月 26 日\*、6 月 13 日、8 月 7 日\*、9 月 28 日\*、11 月 14 日\*、12 月 19 日) 開催された。\* 印はコード委員会との合同会議である。

一方、3 月 13~16 日に Paris で SC 2 が開かれ、わが国から島谷和典 (日本電気)、浦城恒雄 (日立)、海宝 顕 (日本 IBM) の 3 君が参加した。

##### (2) パリ会議の概要

1) code set が再確認された。その中で、位置 2/3 に 0 を入れることは、わが国などの反対にかかわらず決定された。

2) 9トラック磁気テープにビットコードを記す際のトラック割当ては、わが国は option 1 を推していたが、option 3 によることとなった。

3) magnetic labelling の大綱について合意が得られた。

4) 4 ビット subset についても大綱がきまった。

5) OCR, MICR の記号に対する code の割当て、カード上のコードは引続き研究する。

6) 8ビット code set の討議を始める。などであった。

### (3) 委員会の経過

国内の SC 2 は、まず3月のパリ会議まではその議題に対する意見の統一を図ることに注がれた。ついでパリ会議以降は、

- 1) ㄱの記号に対する後始末
- 2) 8 bit code の調査
- 3) JIS のコード原案の作成

に重点が置かれた。

すなわち、1) については位置 2/3 はㄱでなく#記号を用いることを再確認した。

2) の 8 bit code は Zemanek 氏のいうページの概念の入った code 法を調査討議することとしたが、JIS のコード制定に当たっては Zemanek 案を考慮に入れないことを申し合わせた。

3) そこで、JIS のコード試案の制定に専念することとなった。まず national use と認められているところには、次の記号を入れる。

5/12	7/11	7/12	7/13	7/14
¥	{		}	—

またカナ文字はさきの調査結果に従うなどをきめた。そしていずれにしても ISO による 128 字の他にカナ文字 64 字を含めて、7 bit で表示することはできないので、紙テープ上では shift を用いて区別するが、9トラックの磁気テープ上で8ビット目のトラックを使用するか、紙テープの場合と同じにするかは慎重審議の末、いずれでもよいこととし、8単位符号を設けることとなった。このようにして作られた原案は表現を修正した上、近く工技院に答申される予定である。

### 5.3 SC-3

主査 元岡 達

SC-3 に関しては、Expert Group を除き、国際会議は開かれなかった。Printing の Expert Group の報告として、Print Specification が3月にまとめられ、これに関する Working Group が1968年3月5～7日 Geneva で開かれ、わが国からは、支地委員(東芝)が出席した。

国内委員会は主として Print Specification について検討された。これに関する Comment は 97/3/1/

N 114 として提出されている。OCR 側からの要求と Printer からの要求との妥協が主要な論点である。このほか、Font の規格(N 996) が vote された。数表にあやまりがあるので、これについては近く Editorial Comment を出す予定である。OCR 用シンボルに対するコードの決め方についての意見を SC 3 としてまとめ、SC-2 に伝えた。

また、カナ文字のフォントが郵政省の要求で電子協が中心としてまとめられたが、これに OCR を考慮するときは、数字等については OCR-B の font を取り入れるよう要望した。

### 5.4 SC 4

主査 和田 弘

#### (1) 国際活動

SC 4 には、磁気テープ、カード、紙テープの3個の working group が活動して来ているから、それらの内容は WG ごとの報告に譲る。

去る6月27～29日 Italy の Florence で入出力装置(WG 4/4)の第1回会議と SC 4 の第3回会議があった。瀬川(日本電気)、遠藤(電々公社)の両氏が出席した。

WG 4/4 (I/O interface) では、取扱い範囲を決めた上、interface をどのような手順で決めて行ったらよいか、各国の意見を出してくれということで終わった。

SC 4 では instrumentation tape の標準化に取組むために WG 4/5 を設置し、その secretariat はアメリカに頼むことになった。また磁気テープについては原案を修正することになって進展しなかった。つまり unrecorded tape には技術的意見が残っており、recorded tape についても原案を原則として承認したが、内容について再検討を要する部分があるとして、いずれも WG 4/1 に返却された。

紙 tape は光の透過率の値について合意が得られていない。

#### (2) 国内委員会(7月27日)

国内の委員会はこの報告を聞いた上、対策を審議した結果、interface を制定しようする WG 4/4 の動きに対応して国内にも WG 4/4 を設置することとし、その主査に野田克彦氏(電試)をお願いすることとした。また instrumentation tape については、暫くその動向を見た上態度を決めることになった。

### 5.4.1 SC 4/WG 1

主査 木 沢 誠

当委員会は本期間中に3回の会議を開催し、1回の国際会議に参加した。

#### (1) 国内活動

主として資料 No. 85(9トラック, 800 RPI, recorded tape) および No. 86 (1600 RPI, recorded tape) について討議した結果、前者に関してはダイナミックスキューについて、473 および 670 マイクロインチよりはそれぞれ 515 および 900 マイクロインチを望むことはか1点、後者に関しては 1600 RPI 用 unrecorded tape の規格作成が必要であるという提案ほか3点の意見をまとめて文書として提出した (SC 4/WG 1 No. 112)。

#### (2) 国際会議 (3月7~10日, 於 Berlin)

出席者 28 名 参加国 日, 米, 英, 仏, 独および ECMA

わが国よりの出席者 窪田啓次郎, 海宝 顕, 島谷和典

[これに先立って二つの ad hoc 委員会 (skew および instrumentation) が開催された]

結局 15 項目の resolutions が決定されたが、その主要点は

(a) 資料 No. 85 (9トラック, 800 RPI, recorded tape) は若干の意見を織込んで再編集後 SC 4 に送る。

(b) 1600 RPI, unrecorded tape の規格案の骨子が作成された。これにつき各国の意見を求める。

(c) 資料 No. 86 (1600 RPI, recorded tape) については意見を織込んで second draft を作る。

(d) Instrumentation tape については新しい WG を作ることを勧告する。

なお、今回は 1968 年 4 または 5 月に San Francisco で開催される予定。

#### (3) 国際会議後の活動

主として資料 No. 139 (1600 RPI, recorded tape) および No. 130 (1600 RPI, unrecorded tape) の両規格案について討議し、Bit timing の tolerance の数値、および BOT などのマーカの位置に関する提案ほか2点の意見を文書として提出した。

### 5.4.2 SC 4/WG 2

主査 海 宝 顕

#### (1) 概 要

当委員会は第 12 回規格委員会 (1月24日) 以来、

現在までに3回委員会を開催した。

この間、ISO 第2次案「未穿孔カードの仕様」(ISO 文書 97/4/2 N 51) ならびに「80桁穿孔カード上の穿孔の寸法と位置」(ISO 97/4/2 N 52) を検討し、日本の意見をまとめて ISO へ提出した。

これは ISO 文書 97/4/2 N 53 および N 54 として各国に配布されている。またカードの測定方法に関して意見をまとめ ISO へ送った。

#### (2) 国内委審議経過

(a) ISO/TC 97/SC 4/WG 2 のパリ会議 (昭和 41 年 11 月 21~23 日) の結果について検討を行ない、今後の問題を明らかにした。

(b) パリ会議の結果にもとずいて作成された ISO 第2次案「未穿孔カードの仕様」(ISO 文書 97/4/2 N 51) および「80桁穿孔カード上の穿孔の寸法と位置」(ISO 文書 97/4/2 N 52) を検討し、日本の意見 (ISO 文書 97/4/2 N 53 および N 54) をまとめ ISO へ提出した。

(c) カードの測定方法に関して日本の意見をまとめ、ISO へ提出した。

### 5.4.3 SC 4/WG 3

主査 林 智 彦

前年より引続いて討議した「紙テープの特性」に関する日本のコメントを ISO へ 42 年 2 月送付した。主なる主張は次の2点である。

(1) 引張り強さの規格値が、日本の現状とくらべ高いので、それほど高い値を必要とする理由の見当たらないことを述べて、より低い値を提案した (規格案は 40 lb/mch, 日本案は 35 lb/mch)。

(2) 光透過率の値として、日本の現状を基礎に 50% max を提案。

42 年 6 月、フーレスにおいて WG 3 の meeting が開かれ、日本も2名の代表を派遣した。会議の議決事項は次のとおりである。

(1) 紙テープの特性のうち、引張り強さは日本の提案が否決された。

(2) 同じく紙テープの特性のうち、透過率の規定は各国の意見が別れて一致するに至らず、ドイツ提案の新しい測定器を用いて検討を続けることになった。

(3) さん孔された紙テープの一般的取扱い方法について審議されたが、これについても意見が多く出て、結局ごく基本的な事項についてのみ案が作られた。

(4) コアとスプール、今後各国から意見を求める

こととなった。

### 5.5 SC 5

主査 高橋 秀俊

#### (1) 概 況

ISO/TC 97 の SC 5 部会 (プログラム言語) の現在の仕事は ALGOL, FORTRAN, COBOL についての国際標準をつくることであるが, 数年前に工作機械の数值制御のためのプログラムを記述する言語のための作業グループ WG 1 が置かれ, この方の国際標準をつくることも検討されている。

1967年には ISO/TC 97/SC 5 の会合がパリで開かれたので, SC 5 国内委員会の活動もこの会議に対する日本の action をきめることに主力が注がれた。

SC 5 では, ALGOL, FORTRAN に関しては実質的審議はすべて終り, あとは印刷公表を待つ段階になっている (印刷の遅れについてはパリ会議で問題になった)。

COBOL については前年に引きつづき作業が進行中である。パリ会議の主な議題でもあるので当委員会の活動も主としてこれに力を集中した。これに関しては USASI (USA Standard Institute) が原案を出し, 各国がこれに対し修正意見を出すという形で仕事が進んでおり, 5月に USASI から部厚な草案が送付されて来たのでこの資料 (ISO/97/5 N 176) に関する詳細な検討を行なうため, 前回設置がきまった COBOL 作業グループ (主査 西村 恕彦) にこのことを委託した。同作業グループはさらに subgroup を結成してパリ会議に提出する日本の修正案

“Japanese Comments on the COBOL Standards referring to ISO/TC 97/SC 5 (USA 25) 176” を作成し SC 5 事務局に送った。特に問題になった点としては, 資料の配列を level-wise でなく division-wise に変更せよとの提案をしたいという者とそれへの異論とがあって, SC 5 委員会で討議されたが, 結局組み変えた具体的な案を作成し提出することになった。

パリ会議ではこれらの修正案が審議されたが, 結局 USASI の原案どおりとなった。

random processing module に関する部分は新しい問題なので検討が間に合わず, あとから別の資料として送った。これについては USASI が原案を作成することになった。

Character Sets について, 特に ALGOL の hard ware representation が SC 5 の問題となっている

が, これに関しては当委員会の ALGOL 作業グループが審議した結果, アメリカの原案に根本的には賛成であるが次のような修正を加えることを提案することにした。

ALGOL symbol	アメリカ案	修正案
=	—=	—
≡	—EQV	—=
∩	—IMP	—~

パリ会議ではアメリカ案が採択された。

数值制御用プログラミング言語については国内では SC 8 の方で主として検討することになっている。パリ会議については, この問題が SC 5 委員会の議題になるのは今度が最初であり, また国内での経験も浅いので, 日本の意見を特に提出することはしないが, 機械試験所の研野氏をこの部門担当の代表として各国の動きを見まもることにした。

この関係はパリ会議では SC 5/WG 1 で討議され結果は次に述べるとおりである。

#### 議決事項 (227 E)

(1) WG 1 の仕事のプログラムは次のように決める。

(a) プログラミング言語の標準化において適用される SC 5 のクライテリア内に入るかどうかを, 候補言語について決定する。

(b) (i) Scope と Organization, (ii) Languages, current and future, (iii) Subsets and Modular Features を研究する。

(c) 適切な subsets が導出できるような APT に similar な a reference language を定める。

(d) WG 1 は, 混乱を招くことのないように SC 8 や他の数值制御に関係するアクティブな ISO の技術委員会と liaisons を保つ。

(2) WG 1 は次の3項を承認する。

(a) WG 1 は, ドキュメント 97/5/1 N 8 (APT working paper 97/5 (USA-27) 192 のこと) をこの会議で討議し, できる限り差異を除くことにより, elements の resulting sum が 97/5/1 N 8 の形における数值制御用 reference language の a basic part となるであろう。

97/5/1 N 4 ECMA	TC 97/SC 5 (ECMA-11)179	
5 EXAPT-1	"	(Germany-12)183
9 2 CL	"	(U.K.-4) 193

(b) WG 1 は 1968 年 4 月 22 日, 23 日に Scope and Organization に関する ad hoc Experts Group の会議を開催することを決める.

(c) WG 1 は 1968 年 10 月 14 日~18 日に第 2 回の会議を Geneva に開催する計画をする.

そ の 他

(1) EXAPT-Verein

EXAPT の紹介と拡張, 入力フォーマットとポストプロセッサの保守, プロセッサの Supervise と開発, プログラムのドキュメンテーション, EXAPT 活動の広報.

(2) NEL (U.K.)

EXAPT-1, 2 CL, APT (3~5 axis) は別々に独立のプロジェクトとして開発中である. UNIVAC-1108 を有する. European APT Language Standards Committee の提案で NEL, Rep-293, 299 に EXAPT -1, 2 CL のマニュアルを作った.

(3) SC 5 の Work のプログラム

PL 1 やそればかりでなく Programming Tech. を含む多くのプログラム上の Std. についての仕事を SC 5 はやるべきである (200, 185). SC 5 として PL 1 については Action をとらない (Candidate Language として Draft ができるまで). 後者に対して SC 5 は次の議決をして, TC 97 に提出する (226).

5.6 SC 6

主査 米沢 威行

(1) 概 要

当委員会は 1967 年中に第 6 回から第 10 回までの 5 回の委員会を開催した.

第 5 回 SC 6 国際会議 (9 月 4 日~8 日, 於: ジュネーブ) には山本, 小林両氏が出席した.

(2) 国内委員会における主要議事内容

(a) IEC 53 B より, SC 6 と IEC 53 B との作業内容の区分について意見を求められ, 審議の結果「作業は出来るだけ一本化することが好ましく, 一本化する場合には 53 B を SC 6 に吸収合併すべきである」. という結論をえ, 事務局にて「IEC 53 B にたいする返書」を作成することにした.

(b) データ通信制御手順について ISO 第 2 次案 (SC 6-No. 144) 西海委員案, および幹事案を対比させ審議を行ない, 全二重通信への適用, マルチポイント, システムへの適用等に問題点が指摘された.

(c) 第 5 回 SC 6 国際会議の Draft Agenda

の項目について以下の結論をえた.

i) 新しく WG 1 (Communication interface) を設立することには賛成する.

ii) データ通信制御手順については Comment を提出することとし, その案は事務局にて作成することとなった.

iii) 誤り制御手順については, 水平-垂直の parity check を用いることには賛成する. しかし検討する可能性は残しておく.

iv) キャラクタ構成については 1 stop element に賛成する.

v) 信号速度については, 200 ビット/秒をのぞき, 600x2^n ビット/秒を基本原則とすることに賛成する.

以上の結果をまとめてジュネーブの国際会議へ下記二つの document を提出した.

- 1) National activity in Japan. SC 6/173
- 2) Comments on Doc SC 6/144
- 3) 2nd Draft Proposal-Control Procedures for Data Communication S 6/174

(3) ジュネーブ会議

主要決議事項

(1) キャラクタ構成

- i) ビット順序.....低位先行
- ii) パリティビット...パリティの付加, パリティの伝送順位は第 8 番目
- iii) パリティ極性...
  - { 調歩同期伝送方式.....偶
  - { パリティ
  - { 同期伝送方式...寄パリティ
- iv) 調歩同期方式 Type I の通信装置  
 $1S^T+7+1^P+1^SD.....10$  単位  
 Type II の通信装置  
 $1+7+1+2.....11$  単位  
 $7+1.....8$  単位

v) 同期方式

(2) 水平パリティチェック

- (i) 水平パリティは偶数
- (ii) ブロックチェックキャラクタのパリティ
  - { 調歩同期方式.....偶数
  - { 同期方式.....奇数
- iii) ブロックチェックの加算は SOH または STX で開始され, 開始キャラクタは加算に含まれない.
- iv) SOH が加算が開始されたのち現れる STX は加算に含まれる.

v) SYN を除いた全ての文字 (ETB, ETX を含む) は加算に含まれる。

vi) ETB または ETX とブロックチェックキャラクターの間にはいかなる符号も入れてはならない。

#### その他の決議事項

(1) コネクタの機械的、電気的特性をきめるよう IEC/TC 48 に申し入れる。

(2) コネクタのピン配列ならびに WG 1 の報告書を承認し、これを CCITT へ送る。

(3) 4 線式国際回線 (POINT TO POINT) においてデータと電話の交互使用を認めるよう CCITT へ申し入れる。

(4) CCITT への信号品質に関する ISO の提案を承認し、それらを CCITT へ送る。

(5) WG 2 の報告書を承認し、これを CCITT へ送る。

(6) エラーの測定法の研究ならびにエラー測定は続行するよう CCITT に申し入れる。

#### 日本の主張点と会議の結果

上記 Doc Japan-9 で日本は次の点を主張した。

(1) Two-Way Simultaneous system に適用できる Control Procedure の確立。

(2) System Category の明確化。

(3) 制御符号 SOH, STX, ETX, ETB の使用方法に関する追加

(4) 制御符号 ENQ の応答に関する変更。

これらの内容は Doc ISO/TC 97/SC 6, 190 中の (Third Draft Proposal for the Standardization of Basic Mode Control Procedures for Data Communication) で大略次のようになっている。

(1) 項……Two-Way simultaneous system は各国とも結論がでておらず (日本も問題の提起に止った)、Basic Mode 以外は Draft Proposal の検討範囲から除かれ、further study の項目になった。

(2) 項……日本から提出した分類法に従って Basic Mode と Further Study の項目が明確に分類された。

(3) 項……伝送制御符号の使用法の項に盛り込まれた。

(4) 項……いままでの応答も、新しく変更された応答も、いずれも使用できることになった。

## 5.7 SC 7

主査 森口 繁一

### (1) 概要

42 年 1 月～12 月の間に開催した委員会は 2 回、すなわち 1 月 27 日と 12 月 27 日である。

入手した資料は、TC 97/SC 7/40～44 である。これらの資料と、これまでに入手済の資料のうち重要と思われるもののコピーを各委員に配布した。

委員会の内容概略、SC 7 の状況、今後の方針について以下に簡単に述べた。

### (2) 活動の概要

Flow Chart Conventions についての米国案 (TC 97/SC 7/32) についての検討を 1 月 27 日の委員会で行ない、コメントをまとめて発送した。これはその後 TC 97/SC 7/40 として各国に回送された。

12 月 27 日に、その後送られてきた資料 (別記) について検討したが 43 年 1 月～3 月に再検討することとした。検討の要点等は次節に記す。

### (3) SC 7 の状況

Flow Chart Symbol についての検討はすでに終り、Draft ISO Recommendation が回送されるのを待っている状況である (これは 11 月 22 日に工業技術院についていることが 43 年 2 月になって判明した)。

現在の検討の主題は Flow Chart Conventions である。これについてはフランス (TC 97/SC 7/33)、米国 (TC 97/SC 7/32) が意見を出しており、我国は米国案にもとづくコメントを出したことは前述のとおりである。

米国は、Flow Chart Conventions の検討を促進するために、SC 7 だけの国際会議を開くことも提案しているが、国際事務局としては、費用の点もあってその開催には消極的で各回に意見を問い合せている。

## 5.8 SC 8

主査 土井 康弘

(1) SC 8 #2 Meeting 2 月 27～3 月 3 日ロンドンで開催され、池辺、稲葉、北森、宇佐美各氏が出席した。Code, Axis and Motion, Punched Tape Format について審議した。

(2) SC 8 WG 1 # 1 Meeting 5 月 29～31 日パリで開催され、宇佐美出席

NC 機械の用語について審議が行なわれた。

(3) 11 月 15 日用語に関する照会に返事を出す。

(4) Draft Recommendation として下記 6 件について

- # 1314 Code for NC of Machines
- # 1315 Axis and Motion Nomenclature for NC Machines
- # 1316 Punched Tape Block Formats for NCM Coding of Preparatory Function G and Miscellaneous Function M
- # 1317 Interchangeable Punched Tape Variable Block Format for Positioning and Straight Cut NCM
- # 1318 Punched Tape Variable Block Format for Positioning and Straight Cut NCM
- # 1319 Punched Tape Fixed Block Format for Positioning and Straight Cut NCM

1314, 1315 承認, 1316 不承認, 1317~1319 コメント付承認

#### (5) 総 括

コード, 軸, Format; NC 用語; プログラミング言語について検討を行なってきている。

今後 Mag Tape Format の審議が始まるであろう。

### 5.9 WG-K

主査 安藤 馨

#### 概 要

当委員会は 1967 年に 9 回, 1968 年 1 月に 1 回 計 10 回委員会を開催し, ISO/TC 97/WG-K の国内委員会として働くと共に日本におけるデータ, コードの標準化推進のための活動をおこなった。

その活動の概要はつきのとおりである:

(1) 日本におけるデータ・コードの現状を調査検討し, その結果を“調査審議報告書”として出版するために, 1967 年 1 月四つの Study Group を作り検討を開始した。

なお, 作業は現在も鋭意進行中である。

(2) 1967 年 3 月には当委員会の推薦コードである“日付の表現”の審議を終り, 日本案として, ISO/TC 97/WG-K へ, 1968 年 2 月に発送した。

(3) “週の表現”については, これがあまり日本で使用されていないので, ISO/TC 97/WG-K の

将来の決定に従うことにした。

(4) 1967 年 6 月に“府県コード”の審議を終り, これを当委員の推薦コードとすることにした。

(5) 日本におけるデータコードの現状に関し, ISO/TC 97/WG-K より調査依頼があったので, この調査結果を 1967 年 9 月に送付した。

(6) 当委員会は 1968 年に ISO/TC 97/WG-K の会議を東京に招聘すべく, ISO にその旨申し入れた。

(7) 当委は今後検討すべき研究課題を明確にするために, 全国の利用者 9 団体を通じて調査を行ない, 257 の利用者より回答がよせられた。なお, この結果にもとづき当委員会の今後の作業計画をきめる予定である。

(8) 利用者の意見を当委員会の審議に反映させるために利用者懇談会を開くことに決定し, これを 1968 年 2 月 20 日に開催する予定である。

(9) 1967 年の活動報告書を作成し, 1968 年 1 月に ISO/TC 97/WG-K へ発送した。

(10) 当委員会の推薦コードの性格を明確にし, 将来の方針を定めるために, 1968 年 2 月 14 日 JISC と非公式な会合を開いた。

#### ま と め

以上のような経過をたどって, 現在に至っている。今年は 6 月に Amsterdam で Plenary が開催されることになっている。そこで多数の勧告案が採択される予定である。

さいわい, 活動を一段と活発にできるだけの資金に見通しが得られたので, この趣旨に答えるためにも有意義な活動をしなくてはならない。国内活動の成果である報告書の出版とか, JIS 制定への協力, 制定された ISO 勧告の解説など, いくつかの方法が胎動している。

標準化の必要性が一段と強く要請される情勢になってもおり, 会員のお意見を待望する。

(昭和 43 年 3 月 8 日受付)